

## ゼミ活動報告

### 「4人の思いとは —CORE 論文授賞式を終えて—」

氏名 鈴木駿一

肌寒くなったせいだろうか時間が経つ早さを憂いながら、過去の熱き記憶が蘇った。

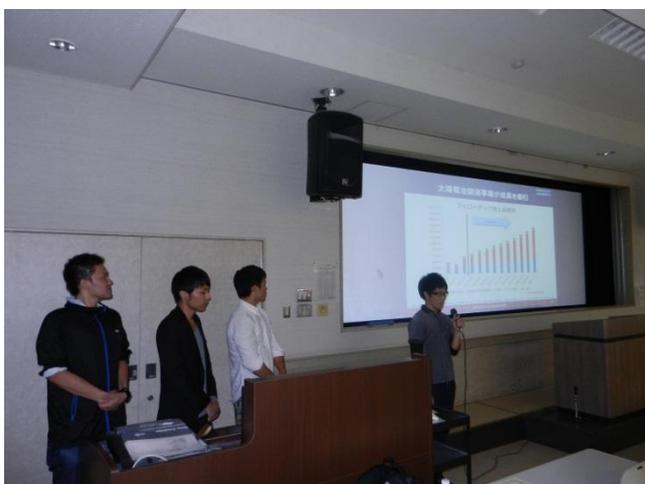
2012年10月11日、大阪市立大学経営学会が主催するCORE論文の授賞式が行われた。宮川研究室で執筆した論文が最優秀賞に選ばれたため、我々は輝かしい舞台へ赴くこととなった。

青山学部長から頂いた賞状を持ち、今までやってきた成果が実ったことに心の底から喜びがこみ上げる……。この論文の始まりは今から約1年前に遡る。当時、我々は最優秀賞を目標に掲げていたものの、企業価値を測るといふ難題にあくせくする日々が続いた。企業価値評価理論を正しく使えているか、予測に整合性はあるか、リスクを考慮出来ているか、論理に矛盾はないか、先



の見えないゴールに朝まで作業は続き、普段では考えられないような激しい言い合いをすることもあった。しかし、4人の目的は最後まで変わらず一緒だった。みんなが驚くような良いものを作りたい……。そんな思いで一心不乱にやってきたので、この論文の作成に要した時間はどこのチームにも負けない自信はあった。あの日々を過ごしたことで最優秀賞という結果を手にした以外にも、もっと大切な何かをつかめた気がした。

今回、このような名誉ある賞を頂き、チームメンバーはそれぞれ語った。



「今回の受賞自体も嬉しかったが、同時に自分達の論文を発表できる機会を頂いた事も嬉しかった。IRCで発表できなかったフラストレーションが一年間を経て解消され、実に気分がいい。(今西)」

「誰よりも宮川先生が喜んでいて、それが一番印象的で嬉しかったこと。1期生として宮川ゼミの基盤づくりに一つ貢献できたのかなと思います。(小坂)」

「素直にうれしかった。なぜなら我々が費やしてきた多くの時間、労力が間違いではなかったことが証明されたからだ。ただ、この結果に満足するのではなく、さらなる高みへ向け別の研究へ邁進したいと思う。(奥本)」

私も彼らと同じ思いである。この結果は我々だけでは到底なしえないものであり、宮川先生を始め、ご支援頂いたすべての人へ感謝の気持ちがやまない。残り少ない大学生活に哀愁を感じながら、また一つ宮川研究室での思い出が心に刻まれた。

最後に私から一言、「出来心でカッコつけたイベント報告になりました。(鈴木)」